

豊かな社会への提言

—大学の建物をもっと立派にしよう—

大 中 逸 雄*

最近の新聞を読んでいると、「経済大国」、「米日独機関車論」などいかにも日本は豊かな立派な国のような錯覚にとらわれる。確かに不景気とは言いながら、多額の外貨、国民総生産、先進国並の国民所得、道を覆いつくす自動車、カラーテレビの普及、多数の海外観光旅行者、商品が豊富で活気のあるデパート、多数の飲食店、新幹線、ゴルフ場など日本の豊かさの一面を示しているのであろう。しかし、日本は本当に豊かになったのであろうか。

「ゆたか」とは広辞苑によれば、(1)満ち足りたさま、不足のないさま。(2)ゆるやかなさま、やすらかなさま。とある。すなわち、「豊かな社会」とは「不足がなくやすらかな社会」のことだとすれば、これは理想的な社会で我々が目標とすべき社会である。では、日本の豊かさとはどのようなものであろうか。

日本の豊かさの現状—バラック文明・文化

前述のような豊かさのほとんどは耐久性のない消耗品的物質の豊かさである。例えば乗用車にしても10年間乗る人はめずらしい上に、エネルギーがなければ使いものにならない“エネルギー消費機械”である。この他、個人住宅、大学、公園などの公共建築、施設なども一口で言えばバラックである。消耗品みたいなものが多い。学術、文芸にしても量は多いが浅薄でちやちやなものが多く後世に残るものが少ない。つまり、現在の日本の豊かさはバラック的文明・文化により成り立っているものではなからうか。

このような豊かさは消失しやすいものであるし、目的とする“豊かさ”にはほど遠いものである。また、このような物質的豊かさは今後予想されるエネルギー、資源、食料不足、寒冷化

に対してもほとんど何んの役にも立たないであろう。例えば、日本の外貨は単なる紙切れのようなもので、円切上げやインフレーションにより簡単に減価されるし、輸入によって何年も食べて行けるほどの額でもない。自家用車などでも石油がどんどん高くなれば車庫で子供の玩具になる位のものである。今のままで行くと、我々は蟻のように働いていながら冬にはきりぎりすのようなことにもなりかねない。

日本の風土とバラック文明

なぜこのような日本の現状になったのであろうか。「消費は美德」のキャッチフレーズに踊らされたのも一つの理由であろう。しかし根本的には日本の風土、歴史および先祖から遺伝された国民性が問題なのではなからうか。すなわち、北海道、東北地方など（江戸時代以前の人口密度は非常に低かった。）を除き、日本の気候は温暖で、命にかかわるほど寒い時期はほんの一時あるかなしで、住居はバラック建築でも十分である。また、石材、レンガなどを使用するよりも木材を使用する方が加工が容易であるし、蒸暑い日の多い日本では、木材のバラック建築の方が、西洋の重厚な石作りの建物より有利である。このような建築物に対する日本人（一般大衆）の感覚が、今なお残っていると思われる。さらに、農耕民族、海洋民族の日本人としては、10年先、50年先の事を計画的に考えるより、季節、自然に時期を失つすることなく対応してこなければならなかったであろう。また江戸時代の影響が大さいと思う。お上に逆らわず、真面目に働き、地震、旱ばつなどがなければ何んとか生活できる、破乱のない平和な、しかしたいした希望もない閉ざされた時代—その中で、社会的にも個人生活上でも長期的計画能力が劣り、他人の目を気にする集団指向的な、あるいはお上に頼る親方日の丸的性向が形成されても無理のないことである。（一方では、欲

* 大中逸雄 (Itsuo OHNAKA), 大阪大学, 工学部 冶金工学科, 助教授, 工学博士

求不満として日本人のバイタリティが蓄積されていたとも考えられる。）

このようにして培われた日本の精神的風土に第二次世界大戦および敗戦による物資に対する欲求不満、アメリカの大量消費文明の影響が重なったのであるから、戦後の経済復興と共に、まずバラック住居を作り、その中に種々の消費物資をつめ込んだ軽薄な消費文明社会が生じたのも当然であろう。さらに地価の高騰やバラック建築のもたらす人心の軽薄化が、このような現象に拍車を加えると共に悪循環の原因にもなっていると思われる。

高等教育の重要さ

このように我々は雨散霧消しやすいバラック消費文明の中におり、将来にはエネルギー、資源、食料不足、寒冷化、老人社会など種々の困難さが待ち構えている。日本の将来は“ばら色だ”などと呑気に構えているわけにはいかない。現在我々に残されている武器は生産力・技術と望むらくはバラック文明に対する不満から生じるバイタリティである。今こそ、我々はこれらの武器を有効に生かし将来の困難さに対する対策を講じなければならない。対策を講じるということは、単に資源のリサイクリングや核融合の開発など科学技術的なことだけではない。まず、我々は、特に有限の資源の中で、また世界の中の日本として、真の豊かな社会とは何かを十分に認識しなければならない。そして長期的計画に基づき一步一步目標を実現せねばならない。この際重要なことは、日本国民の長期的計画に対する認識、理解と徹底的な“真の無駄”の排除である。しかしこれらは、前述のように我々日本人には極めて困難なことである。そこで我々は教育により国民の性格を変えねばならぬであろう。教育の中でも、特に大学などの高等教育が重要であると思う。何んと言っても高等教育を受けた者が与える社会的影響は大きいからである。

振り返ってみると、日本の高等教育は、西洋技術文明の導入のためのもので、西洋に追い付き追い越せと馬車馬のようにやってきた。そこには長期的展望と本当の意味での合理性が欠けており、いわば軽薄な近視眼的人材を多数育て

てきたと言えは言い過ぎであろうか。(余裕がなかったこと、また、このような人材でも十分世の中の役に立ったことも事実であろう。) さらに最近では大学の格差是正の名目で、大学の水準を低い方に合わせるような結果になりつつある。日本を代表すべきいくつかの大学でさえ、研究(論文数といった方が正確)が第一で、成長率、利益第一主義の高度成長時代の企業と同じことである。そこではじっくりと計画を練り、物(資源)を大事にし、無駄を排し、腰を落着けて事を処す態度を身に着けさせることは困難であるばかりか、窮極の目標さえ見失なわれている場合が多いのである。例えば、比較的恵まれているはずの工学部でさえ、建物には威厳がなく、薄汚れ、実験室は雑然としており、学生達は研究室に配属されても、まともな机を持つこともきれいな部屋に入ることもできず、ちゃちな手作りの実験装置で、ちゃちな研究をしてあわただしく卒業して行く場合が多い。このような状況に学生が疑問を持たず当然のことと考えているとしたら、恐ろしいことである。我々は全く逆の教育をせねばならないのである。

結論を述べよう。少なくとも大阪大学はまず建物を100年以上使用できる耐久性のある立派なものにすべきである。広さ、断熱性、天井の高さ、防音性、床、壁の質、外観などの点で今の建物は全く不十分である。次に建物内には100年位は使用できる立派な調度類を入れよう。研究室に配属された学生にも立派な調度類を使用させ、研究室はゆとりがあり、清潔で落ち着いた雰囲気となるようにする。(建物外の自然環境も当然もっと整備されねばならない。)さらに図書館(情報センターと言うべきである。)の充実と、工学系では少なくとも倉庫を忘れないようにしよう。要するに今の2倍も3倍も良い環境にするのである。(それでも世界的スケールで考えれば当然のことでもある。今が悪すぎると思う。)

このような環境から期待されるのは、第一に精神的響影である。「おんぼろ研究室での世界的研究」とか、「おんぼろ学舎から輩出された優秀な人材」などというのは「荒れ寺の高僧」みたいなものでニュースとしては面白いが、そ

れだけに例外的なことである。また、このような場合の“優秀”な人材が、“おんぼろ”を十分認識していれば良いが、もしそうでなければ影響力が大きいだけに、真の豊かな社会にとってはマイナスの人材にもなりかねない。また質素な禅宗にしても、例えば永平寺のように環境については十分配慮しているように思う。つまり確率的には立派な環境（ここでは特に構築物を想味している。）からは立派な人材が輩出しやすいと思う。具体的な影響として、例えば、建物内が整然と美しく保たれていれば学生も汚すのに気が咎めるし、積極的に美しく保つような気風を育てることも可能である。（現状では小・中学校で教育されたことが、社会に出る最終段階で無意味なものになっている。）また、倉庫などのスペースが十分あるから、むやみに物を廃棄せず、きちんと保存し再利用すること、物を大事に使用することなど有限資源下での基本的道徳(?)を身につけさせることができる。

（現状ではスペース優先で、どんどん廃棄するし、金がないから安物買の銭失いを地で行っている。このような状態で、省資源、省エネルギーの研究などを行っても本物の研究はできないと思う。）さらに、立派な建物、調度類を長期間使用することにより伝統に対する認識と、長期的、歴史的思考力が助長されるであろうし、重

荘な建築物に合った教官、学生の自覚や、優秀な人材（世界各国からも）を集めるにも効果的である。

立派な建物の第二の利点として、長期的に見れば必ずしも高くないということである。例えば50年位で建て直す時の費用、建築中の時間の空白、資材の無駄使い、断熱による省エネルギーなどを考えてみればよい。

第三に、本当に現在日本が経済大国であるなら、今の内に立派な大学を作っておくべきである。国としての有効な貯蓄方法の一つである。将来日本が本当に貧乏になっても、立派な建物さえあれば、精神的にゆとりがあり、次の手をじっくり考え得る学生を送り出すことができよう。

第四に、景気刺激対策としても、これ以上ブラック建築を増すよりは波及効果の大きい大学などに資金を投じるべきである。

いずれにしても、人間にとって健康な体が第一であるように、教育機関においても、建物や調度類がいかに重要であるかを我々はもっと認識すべきであろう。また、この事が、筆者が約1年半の西独滞在中に痛感した日本と西独の人間らしい生活の質的格差（西独社会が理想社会でないとしても）を解消するための一案でもある。

(S52. 5. 25)